

第四十三回ふるさと歴史館企画展

吾輩は土器である。

名前はもうある。

どこで生れたか

凡そ見当がつく。

期間

令和八年

一月八日（木）～四月五日（日）

時間

午前十時～午後四時三十分

月曜休館（祝日の際は翌日）

入場無料

石岡市立ふるさと歴史館

石岡市総社1-2-10 石岡小学校敷地内

電話 0299-23-2398

※石岡市における発掘整理作業のあゆみを振り返ります

H52次B6号77エ
780810 No.50
TIN.848

吾輩は土器である。名前はもうある。どこ で生れたか凡そ見当がつく。

◆目次

はじめに	1
遺物の整理について	2
注記について	8
図面と注記からみえるもの	18
おわりに	23

◆例言

本冊子は、令和8（2026）年1月8日～4月5日を会期として開催する石岡市立ふるさと歴史館第43回企画展に際して作成したものです。

展示及び本冊子の編集・執筆は、石岡市教育委員会 文化振興課（金子悠人）が行いました。

はじめに

石岡市では1年に80件ほどの試掘調査が実施されています。調査で土の中から掘り出された土器や瓦など数多の遺物はその後、洗浄⇒注記⇒接合⇒実測・拓本などの工程を経て報告書にまとめられ、広く公開されています。

今回は、そうした整理作業の工程を紹介するとともに、注記を中心とした整理作業の歴史、また整理作業から報告書になった際に何が読み取れるのかなどを紹介します。

きちんと整理作業をした結果、

「吾輩は土器である。名前はもうある。どこで生まれたか凡そ見当がつく。」

と、ある遺物は言ったとか、言わないとか。

普段の展示物を全く違うところからみていくことにしましょう。報告書から情報を読み取ることで、見えない遺跡が眼前に広がるかもしれません。

遺物の整理について

ここでは、遺物の整理手順について、石岡市の例をみていくことにしましょう。ちなみに遺物とは、『日本国語大辞典』を参照すると「昔のもので現在まで残っているもの。遺跡から出た大昔の品物など。また、比喩的に、時代遅れの物事をもいう。」と示されています。また、『発掘調査のてびき』によれば「広義には、過去の人間活動を反映したすべての「もの」を指す。」と書かれています。以上から、発掘調査で発見される土器や石器、金属製品などの「もの」はすべて遺物として考えられるかと思います。

脱線しましたが、そんな遺物の整理手順をみていきましょう。

1 発掘～持ち帰り

発掘によって確認された土器などの遺物は、土が付着したまま袋などに入れて持ち帰ります。持ち帰る際には、荷札などにどの遺跡のどんな遺構（例えば竪穴住居



発掘後持ち帰った遺物。荷札には出土地点などを記しています

跡、掘立柱建物、墓、古墳、城跡など）から出土したものなのかを明記します。遺物と荷札をセットで持ち帰ることが遺物の整理の第一歩です。

2 洗淨

次に、持ち帰った遺物を洗淨します。土器や石器、瓦などは、やわらかいブラシなどを用いて水などで洗い、土を落としていきます。土器には、墨書きで文字がかかっていたり、内面に当時の人々の料理などの痕跡と考えられる炭化物が付着していたりします。そうした当時の人々の痕跡を失うことのないように、慎重な作業が必要となります。荷札は、洗淨した遺物とともに保管されます。発掘現場で記された情報を残すためです。また、金属製品など錆びやすいものに関しては、筆などを用いて土を落とす作業が求められます。



遺物の洗淨の様子。水で丁寧に洗います

3 注記

洗浄が終わると、遺物に注記をしていきます。荷札の情報を土器本体に記入していく作業です。現在では白いポスターカラーを使用することが一般的でしょうか。上からニス塗ることで、水に濡れるなどしても注記が消えないようにしています。注記を行うことで、土器や石器、瓦は荷札とのセット関係が終了し、単体で動かすことができるようになります。また、金属製品や木製品などは、ラベルに書いて添付することで、資料の劣化を防ぎます。



白いポスターカラーでの注記の様子



ニスを塗っている（筆左側）様子

4 接合

単体で動かすことができるようになった土器たちは、接合されていきます。接合とは文字通り土器を接して合わせる作業で、土器の破片をパズルのように組み合わせること

で、鉢や壺などの個体の形状がわかるようになってきます。

近年では、圧痕レプリカ法など新しい研究手法の確立により、この接合作業はより慎重さが求められるようになってきました。小さな破片にも植物や昆虫などの当時の痕跡が確認できるようになってきたからです。そうした情報を失わずに、新たな情報を形作る必要があります。



破片同士を合わせるのに接着剤を使用します



植物の種実の可能性がある圧痕とレプリカ

5 台帳登録

接合が終わると、遺物を台帳に登録していきます。遺物の出土位置や遺構、層位、出土年月などを記録し、テン箱などに入れて保存します。遺物の保管・管理の上で基礎となる作業です。ここでは、報告書に掲載するための遺物の

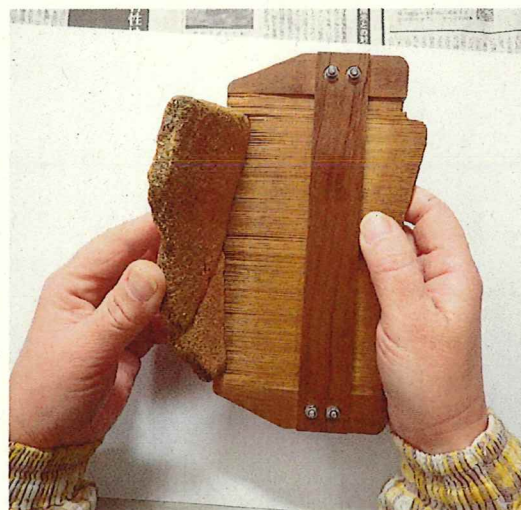
選定もおこないます。

6 実測・拓本

台帳の登録後、報告書に掲載する遺物としない遺物に分類します。掲載する遺物は、遺物の情報を伝えるために図に書いて記録をします。これを実測といいます。実測は、実際にデバイダーやマコなどの器具を使用して計測したものを図におこします。スケッチとは異なり、遺物の器形や装飾、製作時の技法に至るまで丹念に表現することが必要です。



デバイダーで遺物の幅（厚さ）
を計測します

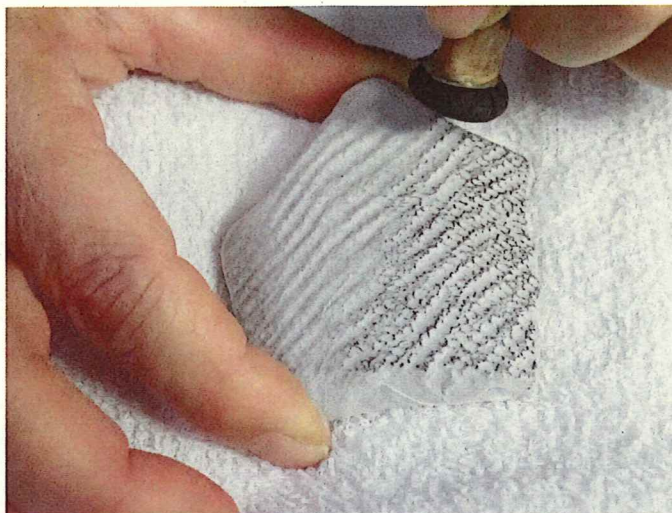


マコで遺物の形を計測します

拓本は、土器などの表面に画仙紙などの紙をあて、その上から墨をうってその形や文様を写し取るものです。簡単

に実物大の情報を写し取れる点が利点です。

こうして、実測と拓本を経て、報告書に掲載する遺物の図が完成します。長い整理作業もここまで経過してはじめて遺物は保管されることになります。



濡らした画仙紙の上から墨でたたいていきます

7 報告書の刊行

手順を経て整理された遺物の図や写真は、報告書として掲載されます。報告書は、試掘・発掘調査で確認された遺跡の内容を後世に伝えるための重要なもので、遺跡の性格が示されています。

現在では、「全国埋蔵文化財総覧」で、インターネットでも石岡市を含めた全国の報告書が数多く公開されています。

皆さんもぜひご覧ください。

注記について

注記について、その歴史を文献や遺物からみていきます。

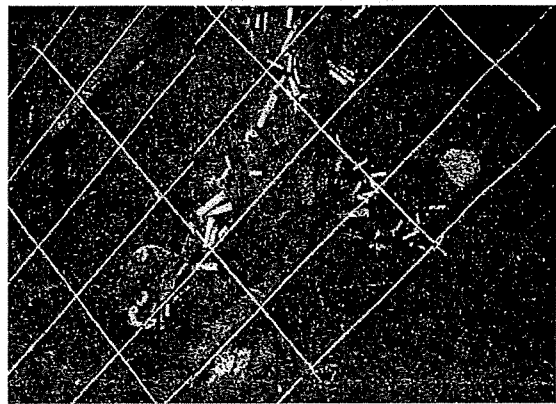
『日本国語大辞典』を確認すると、「書きしるすこと。また、書きしるされたもの。記録。」と述べられています。

古くから遺物への「注記」はされてきたようで、1885年に南方熊楠(1867～1941)が採集した大森貝塚の土器には、既に彼のものと思われる朱墨の注記が確認できます。当時は、展示品のように台紙の上に土器をひもで縛って固定し、その台紙上に日付などを書いている例もあるようです。また、いわゆるお雇い外国人として来日し、日本の考古学を支えたN.G. マンロー(1863～1942)の遺物にも、彼のものと思われる鉛筆や墨での「注記」が認められます。展示タイトルではないですが、明治時代から「注記」の文化がみられます。

戦前の遺跡の調査法などを記した書物に『日本考古学』(1927)と『日本石器時代提要』(1929→1943)があります。

『日本考古学』は、後藤守一が書き記したもので、1952年には石岡市柿岡にある丸山古墳でも発掘調査をおこなった考古学者です。これには、「遺物の番号(略)等は成る可

く墨汁・エナメル・漆液等で物品の裏面に当る所に書き付けておくがよい。」と「注記」の文言はありませんが、土器に発掘場所などを記すべきことが当時すでに周知されていたことが伺えます。丸山古墳では配置図作成のために糸で枠を作成しています。地点などを記す「注記」とも関係するでしょう。



丸山古墳の電探による調査の様子(左)と出土遺物の地点を把握するため糸で枠を作成している様子(右)。

ちなみに、後藤守一を石岡駅から現場まで車で送ったのが後述する廣瀬栄一です（『常陸丸山古墳』より）

考古学者の中谷治宇二郎(1902～1936)の著作である『日本石器時代提要』にも「特に主要な遺物には、一々発見地名、地点、層位等を簡単に記入する」とありその認識が文献上でたどれます。ちなみに、中谷治宇二郎は、世界的な数学者、岡潔と馬が合い一緒に石鑊を掘りに行ったりするなど、各方面での交流も盛んな人物です。

その頃の石岡市に目を向けると、1923年に手塚正太郎とその門下生らによる石岡町史蹟保存会が成立し、石岡の郷

土史研究が隆盛を迎えています。同時期に高浜地区において文化財保護活動を担ったのが廣瀬栄一(1905～1991)です。石岡市には、廣瀬栄一の収集した遺物の一部が寄贈されており、当時の注記の状況の一端を窺うことができます。

展示品の瓦に注目すると、朱墨で「注記」がされていることがわかります。また、土器にはエナメルと思われる筆記具での「注記」がされています。彼は、主要な遺物について墨やエナメル、朱墨など多様な方法で「注記」をしています。また、廣瀬栄一とも交流があり、貝塚研究などで著名な酒詰仲男(1902～1965)が1952年に日立市南高野貝塚を調査した際の遺物は、現在太田第一高校にその一部が保存されています。そこでは右写真のように、シールを貼り付けたうえでそこに番号などを記しています。酒詰自身は「レッテルを



シール(「レッテル」)による「注記」。番号が付されています(『茨城県考古学協会誌』37より)

貼る」(1951)ことも欠点があるとも述べていますが、当時広まっていた方法の一つであることは読み取れます。

この時代には、『日本考古学』、『日本石器時代提要』など

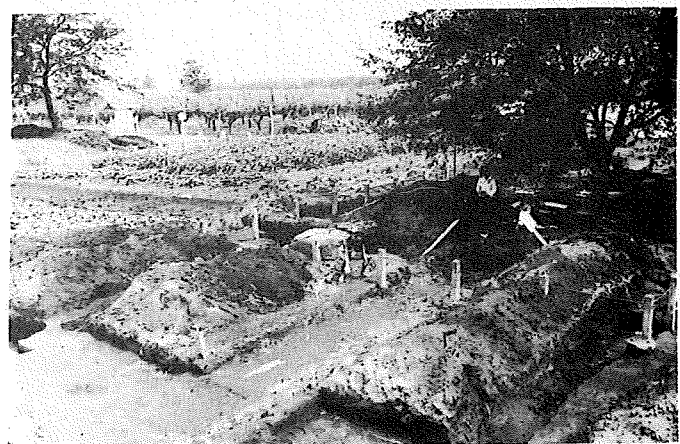
からも確認できるように、「注記」の手法自体は広く浸透していたものの、その手法は各研究者や郷土史家に委ねられていたことが推測されます。

戦後には、考古学の発掘・整理手法などを記した文献が次々に出版されます。『考古学の基本技術』(1958)では、「目立たないような部分を選んで**朱又は墨**で書きこむ」と述べられています。「注記」の道具を規定した比較的早い文献と考えられます。ただ、ここでは「**書きこみ**」との文言が使用され、「注記」の語は使用されていないことに注意が必要です。同時期の『図解考古学辞典』にも、「拓本」の文言はありますが「注記」の語は掲載がありません。一方、同年に出版された『考古学の調査法』には、「**注記**は判り易く、おちにくい方法でやる」と示されています。注記の文言の登場はこのあたりと思われるのですが、注記の語の幅広い浸透は時代が下る 1970 年代と思われます。それを裏付けるように 1966 年には、文化庁文化財保護部により『埋蔵文化財発掘調査の手引き』が刊行されますが、「遺物への**記入**は、**墨などの消えない材料**で（略）書く。黒曜石や石器などの黒いものには**白のポスターカラー**で書き、（略）**透明なビニー**

ル塗料を塗る」と書かれており、「注記」の語は使用されていません。

このころの日本は高度経済成長の真っ只中であり、各地で開発に伴う遺跡の破壊に対応する必要がありました。そのため、統一的な基準による整備が志向されたのはもちろん、各地での考古学的な転換を迎えています。茨城県でも、1966年には常総台地研究会が成立し、1968年には『茨城考古学』が創刊されるなど、そうした背景に合わせた考古学的な動向が確認できます。また、1973年には筑波大学先史学講座も開講しています。

石岡市でもそのような動向に合わせ、1969年から常陸国分寺跡・常陸国分尼寺跡の発掘調査が実施され始めます。しかしながら、そこで出土した



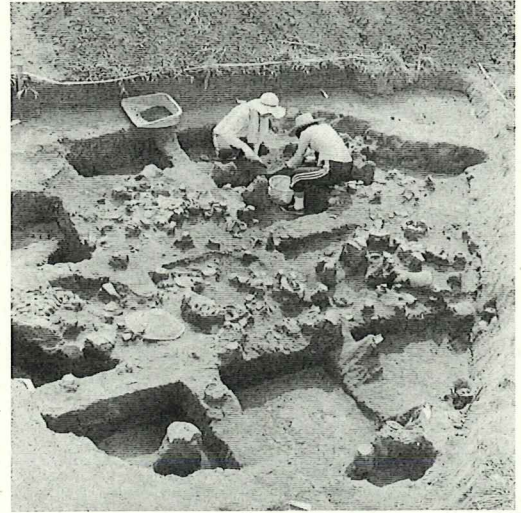
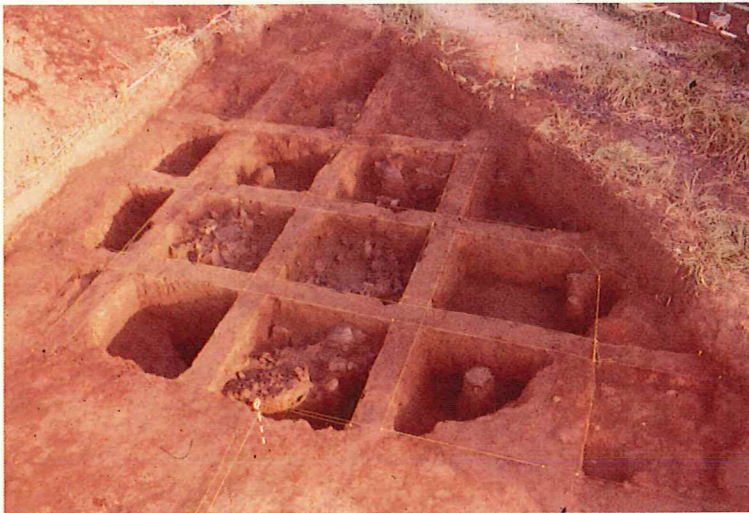
常陸国分尼寺での第一次発掘調査(1969)。中門跡(下写真)・回廊跡・金堂跡(上写真)が調査されました(『常陸国分尼寺址調査報告』より)

遺物には、明確な注記はありません。統一的な基準の完全な浸透までに至っていないことがこれらの遺物からも窺えます。

この時期の発掘調査法の概説書も概観すると、『野外考古学』(1966)では、「**注記**は**墨・朱墨・マジックインク・白色ペイント**を用いる。水溶性のものは避けなければならない」と示し、『石器と土器のはなし』(1969)では「かんたんに**記名**」する必要があることが書かれていますが、道具の説明はされていません。『考古学概説』(1972)でも「一つ一つ**記号**をつける」との記載に留まります。『手引き』(1966)刊行後も石岡市の遺物にみられるように、統一的な整理手法の整備には時間がかかっています。注記の道具についても、墨、朱墨、ペイント、ポスターカラーなど多様な方法が確認できます。

1977年の石岡市では、東大橋原遺跡の第1次調査が開始されます。この遺物には白のポスターカラーでの注記が認められます。調査参加者の言によれば、主要遺物には、注記をするような方針であったようです。それを反映するかのよう、この報告書では遺物の出土状況を示した平面

図・断面図が掲載されています。注記の目的として、その遺物がどこの場所や地層から出土したかを明確にする目的があります。注記は図と合わせることでより効力を発揮しますので、発掘調査の精緻化が見て取れます。1950年代後半から始まり、1960年代を中心に日本各地でおこなわれてきた本格的なドット調査の石岡市における萌芽とも言えます。これらの調査については、次の章でも言及します。



東大橋原遺跡の調査(1978、第2次)。ベルトの設定や遺物の位置などの情報を写真からでも読み取れます(『石岡市東大橋原遺跡』より)

1980年代になると、大規模な発掘調査が数多く実施されるようになります。財団法人東京都埋蔵文化財センターが設立するなど、より発掘調査体制の整備が進んでいます。1980年には茨城県内でも石岡市の発掘調査をリードした関係者も多数在籍する婆良岐考古同人会も発足していま

す。

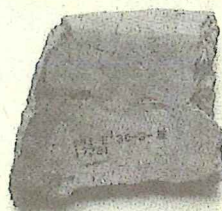
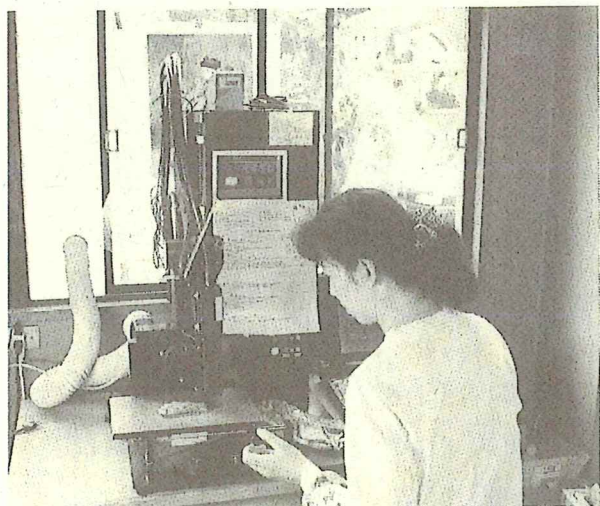
このころになると、発掘調査法を示した概説書にも明確な変化が出てきます。『発掘の整理と知識』（1985）では、
「**注記**は**白のポスターカラー**で面相筆を用いて書き、その上に**ラッカー**などを塗って保護します。しかし長期間色あせない点では、伝統的な**墨**を用いる」としています。また『考古学入門』（1988）でも「(略) **注記**する。**白ないし黒のポスターカラー**で(略)記入し、**クリヤラッカー**などでその上をコーティングする」と記載されています。このころから急激に埋蔵文化財の整理手法が確立してきたことが窺えます。注記の語は多くの文献に登場し、これ以降現在に至るまでの発掘調査方法を示したほとんどの概説書にはポスターカラーでの注記をおこなう旨の記載も確認できます。またラッカーの塗布など注記の保護についても具体的に述べられています。

石岡市に保管されている遺物も、こうした動きに合わせてポスターカラーでの注記が一般化してきます。1977年の東大橋原遺跡の発掘調査の段階では、注記をコーティングするに至っていなかったのですが、ニスによるコーティン

グも一般化し、現在もその手法が継続されています。

墨汁などを使用し、「消えないもの」を目指しておこなわれてきた注記は、調査の進展により「消せるもの」へと性格を変え、ポスターカラーなど新たな道具が台頭しました。また、「消せるものの保護」としてニスなどをコーティングする整理上の流行が認められました。

新しく 2010 年に刊行された『発掘調査のてびき－整理・報告書編－』では、**注記**について「**白色のポスターカラー**または**墨汁**と、**面相筆**などの細い筆記具を用いておこなうのが一般的である。ただし、施釉された陶磁器には、**油性のペン**が適している。また、**インクジェットプリンター**や**レーザーマーカ**の原理を用いた機器も開発され（中略）」としています。今後は、ポスターカラーから機器への流れを窺えますが、その機器の広がりには資金や方法論的な側面などが



2002 年に効率化を図るものとして紹介された遺物注記システム(左)と実際に注記された遺物(右)
(『公共事業と埋蔵文化財』より)

ら十分とは言えません。

注記を中心に、全体の歴史および石岡市の動向をみてきました。戦前の主要遺物への「注記」、1950年代までの「注記」の語の登場と方法の普及、1960年代～70年代の『手引き』を皮切りとした注記の語の台頭と、整理方法の漸進的な統一、1980年代以降の大規模発掘を嚆矢とした注記・道具の一定の統一から現代への流れを確認できました。

石岡市でも、戦前は廣瀬栄一などの資料からエナメルや墨での「注記」がありました。1960年代は遺物への注記は認められませんでした。1970年代からは注記手法の導入やポスターカラーの使用、1980年代を迎えニスによる保護の広がりなど全体の流れとおおよそ関連した動きがみて取れました。

一つの整理行為にも、これだけの歴史があります。細かいところから歴史を観察することで、より重層的に歴史を考えるきっかけにしていいただければ幸いです。

※現在注記について、さらなる情報を収集しています。ご覧の皆様の中で、〇年に墨を使っていたなどのエピソードがありましたら、お寄せいただければ幸いです。

図面と注記からみえるもの

ここまで、整理作業の方法、注記も含めた石岡市の整理作業の歴史を確認しました。ここからは、発掘調査の図面を検討した結果、どんなことがみえてくるのか、東大橋原遺跡で出土した一つの土坑を例にみていきましょう。ちなみに土坑とは、一定の大きさ・深さをもつ穴のことです。用途としては落とし穴やお墓など多様な可能性が考えられます。

今回みていくのは 1978 年に発掘された東大橋原遺跡の B-6 号土坑です。今回紹介する土坑は袋状土坑ともいわれ、食物を保存したり、粘土を採掘する穴であった可能性が指摘されています。

注記の章でも述べたように東大橋原遺跡は、①遺物の平面図・断面図が残されている、②遺物に注記がされている、③フィルム写真が比較的良好な状態で残存しているなど、当時の調査としては発掘の軌

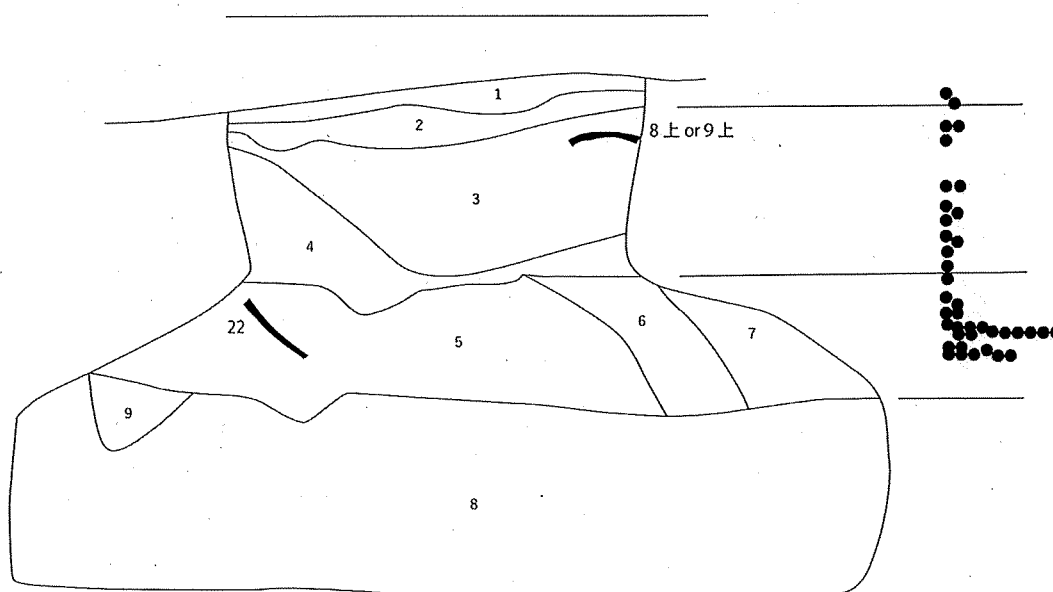


残されていた写真の一部

跡が比較的追いやすい遺跡です。また、今回検討した B-6 土坑の遺構図には、展示のように幸運にも、④遺物の高さを示した眼高とエレベーションのメモが残される、という条件も重なりました。

また、大個体の破片と思われるスケッチも 2 点残されており、これらを写真とも整合することで、遺物の出土した高さが特定できます。これと層位を重ね合わせることで、およその遺物出土位置を特定することができました。

図がエレベーションのメモとそこから復元した遺物の出土位置を土坑図に照らし合わせたものです。

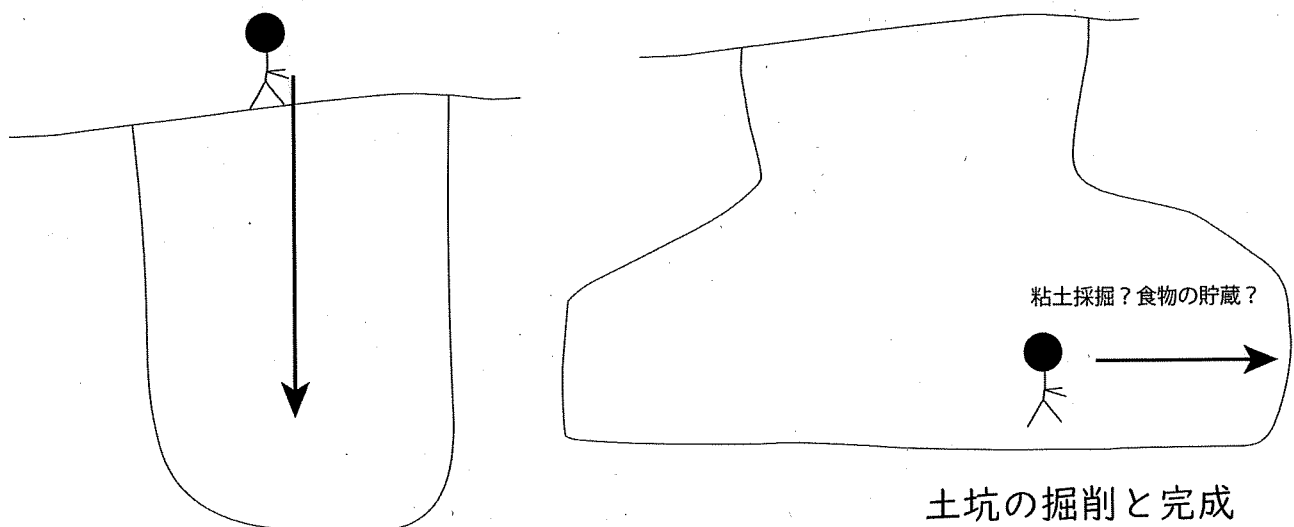


遺物番号	レベル	対象遺物	層位
4	-17		
5	-20		
6	-26		
7	-26		
9上	163 -27.5	奈良国印5	
8上	164.5 -29	奈良国印2	
1	-41.5		
20	177 -41.5		1-4層
3	-45		
9下	183 -47.5	奈良国印5	
16	184 -48.5	石	
19	188 -52.5		
2	-54		
17	192 -56.5		
43	-59.5		
18	199 -63.5		
28	204 -68.5		
22上	204.5 -69	奈良国印1	
27	206.5 -71	石	
14上	206.5 -71		
29	208.5 -73		
25	209.5 -74		
30	209.5 -74		
Z3istone	209.5 -74	石	
21	210 -74.5		
24	211 -75.5		
42	211 -75.5		
15	212 -76.5		
26	212 -76.5		
31	212 -76.5		
40	212 -76.5		
41	212 -76.5		
32	213 -77.5		
33	214 -78.5		
35	214 -78.5		
36	215 -79.5		
34	216 -80.5		
37	216 -80.5		
38	216 -80.5		
14下	210.5 -81		
39	217 -81.5		
22下	222 -86.5	奈良国印1	
10	記載なし		
11	記載なし		
12	記載なし		
13	記載なし		
14	記載なし		

エレベーションのメモとそれをもとに遺物の出土位置を示した土坑図

B-6 号土坑は、1-4 層が明褐色土層、5-6 層が暗褐色土層、7-8 が明褐色土層と記されており、4 と 5 の間に区切りのように線が引かれています。層位は 1-4 層、5-6 層、8-9 層のまとまりで考えることができそうです。

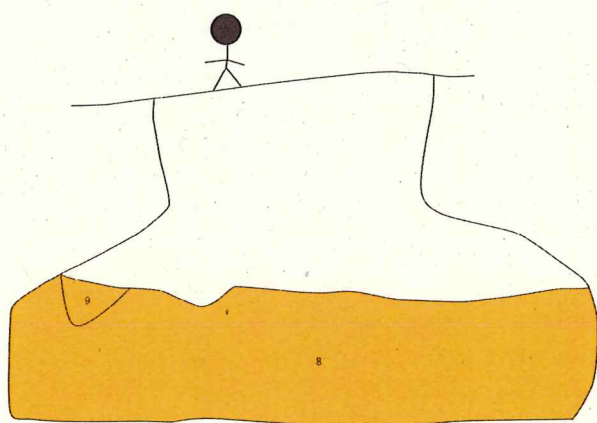
では、B-6 号土坑の成り立ちから廃棄までをみていきましょう。まず図のように垂直に穴を掘ります。次に、食料の保存のためか、粘土の採掘のためか、詳細はわかりませんが、一定の深さから地面と水平方向に掘り進められます。ここまでで、土坑が完成します。



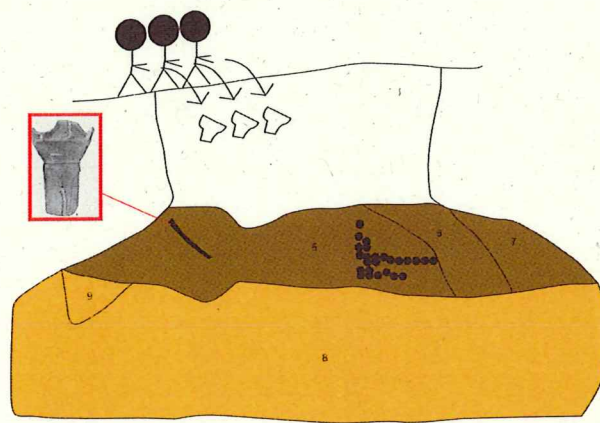
土坑が完成した後は、しばらく当時の人々が使用していたのではないのでしょうか。具体的な存続時期は不明です。土坑が必要でなくなると、今度は埋め戻されていきます。次に、その様子をみていきましょう。

まず土坑の底に近い部分である 8-9 層が埋まります。図面のデータから、ここでは土器がほとんど入っていない様子がわかります。一旦、深く掘った部分を埋めようとしたのでしょうか。

その後、5-6 層が堆積します。ここでは、土の中に大量の土器が入っています。穴を埋めながら土器も一緒に埋めたのでしょうか。赤で囲われた土器もここで廃棄されています。



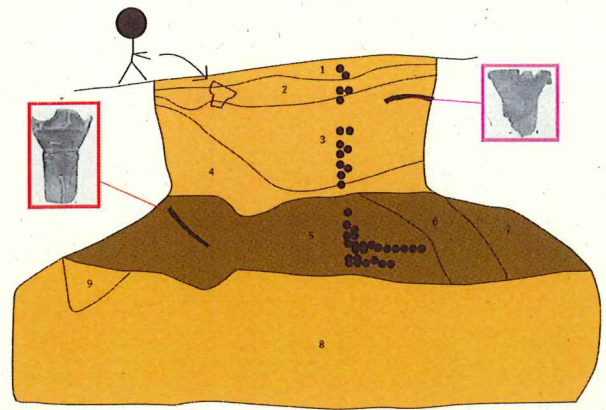
廃棄スタート！最初は土だけ埋めるのでしょうか



土器も捨てられていきます。まるでごみ箱のようです

最後に 1-4 層が埋まります。ここでも土器が一定量含まれていることがわかります。ピンク枠の土器もこの時に捨てられています。ここで土坑は完全に埋まり、役割を終えることとなります。

ここでさらに注目すべきは、土器の年代です。赤粋の土器にみられる阿玉台Ⅳ式という土器と展示品にある阿玉台Ⅰb式という土器が、ほぼ同時期に捨てられています。これらは、土器の型式からみる



穴が完全に埋まりました。土坑の一生も終わりを迎えます

と約200年の差があり、阿玉台Ⅰb式のほうが古いものです。阿玉台Ⅰb式の土器は、大切に保持されていたのでしょうか。これらの遺物からは当時の人々の土器の製作から廃棄までの性格の一端を窺うことができます。

平面図や断面図などの図面類や遺物への注記・撮影した写真、図面に書かれたメモなどを複合的に使用することで、一つの土坑の発生→使用→廃棄という流れを確認することができました。

ここからは、発掘調査の様子だけでなく、当時の人々の生活も思い浮かべることができるかと思います。

おわりに

今回の展示は、整理作業の工程や注記を中心とした整理作業の歴史、整理された報告書からどんなことが読み取れるのか、についてみてきました。

整理作業は、普段皆さんはほとんど見ることはないかもしれませんが、各地で展示される遺物の一つ一つは紹介した作業を経て公開されているものです。

ぜひ、みえない作業にも思いをはせるとともに報告書にも目を向けていただければと思います。

<展示に使用した主な参考文献等>

- ・高橋健自 1913『考古学』
- ・後藤守一 1927『日本考古学』
- ・中谷治宇二郎 1943『校訂 日本石器時代提要』
- ・酒詰仲男 1951『先史発掘入門』
- ・後藤守一・大塚初重 1957『常陸丸山古墳』
- ・藤田亮策ほか 1958『考古学の調査法』
- ・近藤義郎 1958『考古学の基本技術』
- ・水野清一・小林行雄 1959『図解考古学辞典』
- ・文化庁文化財保護部 1965『埋蔵文化財発掘調査の手びき』
- ・藤田亮策 1962『日本考古学辞典』
- ・大井晴男 1966『野外考古学』
- ・藤森栄一 1969『石器と土器の話』
- ・石岡市教育委員会 1970『常陸国分尼寺址調査報告』
- ・駒井和愛 1972『考古学概説』
- ・森浩一 1976『カラーボックス 考古学入門』
- ・石岡市教育委員会 1978『石岡市東大橋原遺跡』1
- ・下中邦彦 1979『世界考古学事典』上
- ・服部敬史 1985『発掘と整理の知識』
- ・共和開発株式会社 開発部 1998『ほろダス』
- ・斎藤忠 1992『日本考古学用語辞典』
- ・文化庁 2000『公共事業と埋蔵文化財』
- ・田中琢・佐原真 2002『日本考古学事典』
- ・斎藤忠 2004『改訂新版 日本考古学用語辞典』
- ・小林達雄 2007『考古学ハンドブック』
- ・品川区立品川博物館 2007『日本考古学は品川から始まった』
- ・窪佳世 2011「考古資料を取り扱う博物館実習指導について」『名古屋女子大学紀要』57
- ・小林謙一 2011『発掘で探る縄文の暮らし』
- ・佐々木憲一ほか 2011『はじめて学ぶ考古学』
- ・横浜市歴史博物館 2013『N.G. マンローと日本考古学』
- ・金子悠人 2025「東大橋原遺跡の再整理に向けて」『第8回石岡市文化財調査報告会』
- ・金子悠人ほか 2025「酒詰仲男の南高野貝塚調査―残された史資料の活用―」『茨城県考古学協会誌』37
- ・謝辞(50音順)
展示に当たっては、下記の方々にご助言・ご助力いただきました
川井正一、谷仲俊雄

Memo

[illegible]

This image shows a full page of white paper designed for handwriting practice. It features approximately 20 horizontal dashed lines spaced evenly across the page, providing a guide for letter height and placement. The lines are thin and black, contrasting clearly against the white background. There is no text or other markings on the page.

石岡市立ふるさと歴史館 第43回企画展
吾輩は土器である。名前はもうある。どこで生れたか凡そ見当がつく。

令和8年1月8日発行

編集・発行

石岡市教育委員会 文化振興課

〒315-0195

茨城県石岡市柿岡 5680-1

TEL 0299-43-1111

石岡市立ふるさと歴史館

〒315-0016

茨城県石岡市総社 1-2-10

TEL 0299-23-2398